４．鬱陵島調査報告

鬱陵島も今日の竹島問題を考える際には重要な場所である。日本側では、江戸時代前期、伯耆国米子の商人大谷・村川家によって、鬱陵島渡海の際に、現在の竹島を中継地または経済活動の場所としていた。また近代に竹島が島根県に編入されてからも、漁業では、隠岐諸島だけでなく、日本人によって道洞など鬱陵島との結びつきがみられた。韓国側では現在の竹島（独島）は、もとは史料や絵図に記載される「于山島」であり、鬱陵島の属島であったと主張している。こうした歴史的事実や主張を確かめるためには、文献や絵図の調査だけでなく、現地での調査が欠かせない。

鬱陵島の調査目的は以下の４点である。

１点目は日本側作製の絵図、特に江戸時代中期に鳥取藩が作製した竹島（現在鬱陵島）関係の絵図と現地との比較をすることである。鳥取藩が作製した竹島関係の絵図は、浦の名前など記載内容が豊富であり、絵図に描かれる地形、地名と現地との比較を行なった。従来の研究では、鳥取藩作製の絵図は、日本が経済的に利用していた史料としてよく利用されてきた（川上1966、塚本1980など）が、この絵図が鬱陵島の地理的状況をどの程度正確に描いているかどうかについてはこれまでほとんど検討されてこなかった。また韓国側の研究ではほとんどとりあげられることがなかった。

２点目は朝鮮側作製の絵図と現地とを比較することである。鬱陵島を詳細に描いた朝鮮側作製絵図は、1711年朝鮮王朝の調査により作製された「欝陵島図形」が初見であるが、本調査では、この「欝陵島図形」をもとに作製されたと考えられる18世紀中期作製の「鬱陵島図」を使用した。絵図の記載のなかでも、特に鬱陵島の東側に描かれた「所謂于山島」が韓国側の主張する独島（竹島）であるかどうかを現地で確認した。この絵図については、日本側では塚本孝氏（1980）が于山島を鬱陵島の東側に描く絵図として、同種の絵図（「大東輿地図」及び、「朝鮮輿誌」所収「欝陵島図」）を検討しているものの、韓国側では、韓国の古地図を幅広く掲載した『韓国の古地図』（李1991）にも収録され、鬱陵島の地理的状況を描く絵図として重要であるにもかかわらず、これまでの研究ではほとんど取り上げられることがなかった。つまり、上記の鳥取藩作製の絵図同様、この絵図が鬱陵島の地理的状況をどの程度正確に描いているかどうかについてほとんど検討されていない。

３点目は1900年の大韓勅令第41号に記載される鬱陵島、竹島、石島がどこにあたるのかを現地で確認することである。すなわち、鬱陵島に付属する島、岩について、地形図をもとに確認した。地形図は陸地測量部発行（1917年測図、1918年発行）、50,000分の１地形図「欝陵島」を使用した。この地図は鬱陵島をほぼ正確に測量し、作製された最初の地形図である。なお日本への帰途、釜山で韓国発行（2006年発行）の25,000分の１地形図「鬱陵」を購入し、帰国後比較を行なった。調査では、特に石島が韓国側の主張する現在の独島（竹島）か、日本側が主張する現在の観音島であるかどうかを確認した。

４点目は、独島博物館に展示してある絵図、地図を確認し、絵図・地図に関する韓国側の主張を確認することである。鬱陵島調査では、調査に同行した関係者をはじめ、独島博物館、そして鬱陵島の島民の皆さまに、種々配慮頂き、大変お世話になった。心からお礼を申し上げたい。

１）日本側作製絵図の現地での比定

鳥取藩作製の竹島（現在鬱陵島）関係絵図のなかで、特に重要な絵図は次の２点である。１点目は元禄９年（1696）作製と推定される「小谷伊兵衛より差出候竹嶋之絵図」（鳥取県立博物館所蔵8443号）、もう１点は享保９年（1724）閏４月作製の「竹嶋之図」（鳥取県立博物館所蔵8439号）である。この絵図は享保９年（1724）閏４月16日に竹島に関する書付を鳥取藩が幕府へ提出した際に、幕府の求めに応じ

て幕府へ提出した絵図の写である。すでに２章で述べたように、8443号絵図と8439号絵図は、絵図の記載内容（特に浦の位置）が異なっている。現地での浦の比定も別々に行なった。

絵図の現地比定の際にポイントとなったのは以下の点である。１点目は8443号絵図には島内で唯一河川が描かれ、島の中央から西に注いでいることである。この川は、後で取りあげる18世紀中期に朝鮮で作製された「鬱陵島図」（『海東地図』所収）にも、島の中央に位置する聖人峰から西へ流れる川に「大川流出」と記され、島内でも一番大きな川であったとみられる【図1-5】。この川は、絵図、地形図、現地との対応との結果、台霞へ流れる台霞川であることが分かった【写真4-1】。２点目は、同じく8443号絵図に記された、島の南端に位置する「唐船かはな」である。絵図では島状に描かれているが、実際には、南端には島はみられない。しかし「はな」とは「鼻」、すなわち、突き出た先の部分、先端を指すことから、島の南端に位置する岬、現在の可頭峰であると考えられる。陸上からは容易に近づくことの難しい場所であることが分かった【写真4-2】。３点目は同じく8443号絵図に記された、島の東に位置する「まの嶋」である。絵図をみると、島から少し離れていること、そして、島に竹が密生して描かれていることから、この島は、鬱陵島の西約２㎞ に位置する竹嶼（韓国名竹島）であると考えられる【写真4-3】。４点目は集落の位置である。地形図の検討及び現地調査の結果、鬱陵島では地形の制約上、集落ができる場所は限られ、その多くは小さな河川が注いでいるところであった。集落のなかでも比較的平地が広く、戸数が大きな集落が、絵図で描かれた浦名とおおむね一致することが分かった。8443号絵図では、島での経済的活動のために拠点として設置されたと考えられる小屋がどの浦にも描かれている。

以上の検討から、絵図に記載された浦名などを比定したのが、表4-1、図4-1（8443号絵図）、表4-2、図4-2（8439号絵図）である。8439号絵図の検討の際には、浦の位置から同系統の絵図とみられ、またより記載内容の詳しい、以下の２点の絵図も使用した。１点目は村川家所持と伝える「竹嶋絵図（写真版）」（米子市立山陰歴史館所蔵）、もう１点は8443号絵図をもとに、水主の聞き取りから記載内容の訂正を記した絵図で、その訂正内容が8443号絵図と似ている、享保９年（1724）の「小谷伊兵衛ニ所持被成候竹嶋絵図之写」（米子市立山陰歴史館所蔵）である。

8443号絵図では、絵図上で浦と比定される浦集落は、東から北へ反時計回りに、道洞里、苧洞里、臥達里、天府里、玄圃里、台霞里、南陽里【写真4-4～4-9】であると考えられる[1]【図4-1】。また絵図には、島の各地点での経済活動について記している【表4-1】。なお、8443号絵図に地名だけ記され、位置の記されていない、柳浦瀬戸、たつかはな、竹ノ子嶋、鮑浦瀬戸は位置の特定ができなかった[2]。浜田浦、大坂浦、北浦、柳浦、北国浦、竹か浦では、浦の周辺（約２、３町：約220～330m）ではアワビをとらず、みち（ニホンアシカ）をとる場所であるため、採取が終わるまではアワビをとらないとしている。アシカ漁をしていない時には、アワビも採取していたことが分かる。一方鮑浦、柳浦瀬戸、いか嶋、唐船かはな、たつかはな、竹ノ子嶋ではアワビを採取していたとしている。瀬戸とは、幅の狭い海峡を指すので、周辺の岩礁を指すと考えられる[3]。さらに、島内では、竹か浦、柳浦、鮑浦の周辺、そしてまの嶋に竹林が絵で描かれており、特に柳浦とまの嶋では密生して描かれているのが注目される。竹島（現在鬱陵島）が名前の通り、竹の密生していた島であったことが分かる。また北国浦と大坂浦の周辺と、山地には林が絵で描かれている。

8439号絵図では東から北へ反時計回りに、沙洞里、道洞里、苧洞里、天府里、玄圃里、台霞里、南陽里【写真4-4～4-9、4-11】であると考えられる[4]【図4-2】。浜田浦には「此処へ船入津仕候、併南風ニハ船懸り難く御座候ニ付、船居置申候」（8439号絵図）とあることから、米子の大谷・村川船は浜田浦から鬱陵島に入っていたことが分かる。また南風では船の停泊が難しいので、船をすえ置いたとしている[5]。南風の記載や、いか嶋（胃島・北亭岩、韓国名北苧岩）の位置から、浜田浦は現在の道洞と考えられる。

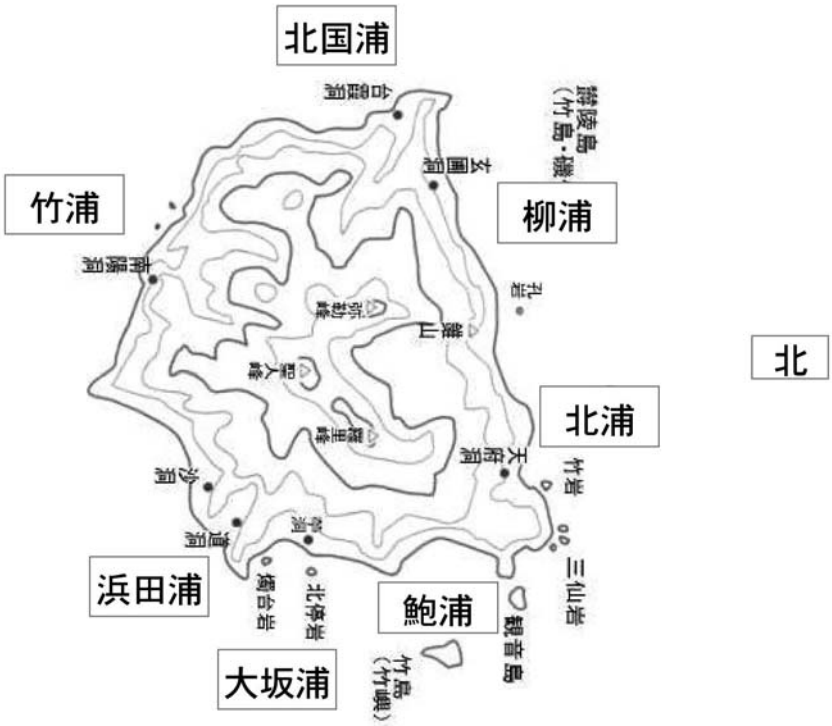

図4-1　「小谷伊兵衛より差出候竹嶋之絵図」（8443号）に記される浦名の現地比定

表4-1　「小谷伊兵衛より差出候竹嶋之絵図」（8443号）の現地比定と経済活動

絵図の地名	現在の地名	経済活動
浜田浦	道洞里	左右２、３町は鮑取らず、みち場にて仕舞候内取らず
大坂浦	苧洞里	左右２、３町は鮑取らず、みち場にて仕舞候内取らず
鮑浦	臥達里	専一に鮑取る
北浦	天府里	左右２、３町は鮑取らず、みち場にて仕舞候内取らず
柳浦	玄圃里	左右２、３町は鮑取らず、みち場にて仕舞候内取らず
柳浦瀬戸	不明	鮑取る
北国浦	台霞里	左右２、３町は鮑取らず、みち場にて仕舞候内取らず
いか嶋	北苧岩(北亭岩)	鮑取る
竹か浦	南陽里	左右は鮑取らず、みち場にて仕舞候内取らず
唐船かはな	可頭峰	鮑取る
たつかはな	不明	鮑取る
竹ノ子嶋	不明	鮑取る
鮑浦瀬戸	不明	鮑取る
まの嶋	竹島（竹嶼）	鮑取る

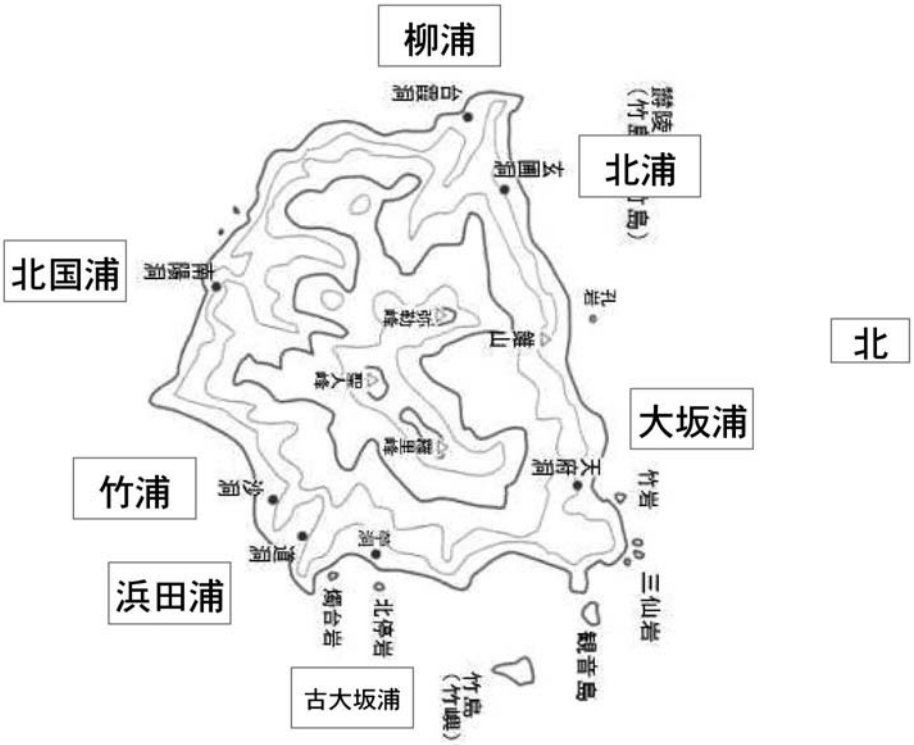

図4-2　「竹嶋之図」（8439号）・「竹嶋絵図（写真版）」・「小谷伊兵衛ニ所持被成候絵図之写」「小谷伊兵衛ニ所持被成候竹嶋絵図之写」に記される浦名の現地比定

表4-2　「竹嶋之図」（8439号）及び「竹嶋絵図（写真版）」・「小谷伊兵衛ニ所持被成候竹嶋絵図之写」（米子市立山陰歴史館所蔵）の現地比定と経済活動

絵図の地名	現在の地名	経済活動
浜田浦	道洞里	鮑之所務の義3月上旬より末方まで、みちのあぶら所務の義4月中旬より5月中旬まで
大坂浦	天府里	鮑之所務の義3月上旬より末方まで、みちのあぶら所務の義4月中旬より5月中旬まで
古大坂浦	苧洞里	不明
北浦	玄圃里	鮑之所務の義3月上旬より末方まで、みちのあぶら所務の義4月中旬より5月中旬まで
柳浦	台霞里	鮑之所務の義3月上旬より末方まで、みちのあぶら所務の義4月中旬より5月中旬まで
柳浦世戸	不明	不明
北国浦	南陽里	鮑之所務の義3月上旬より末方まで、みちのあぶら所務の義4月中旬より5月中旬まで
いか嶋	北苧岩(北亭岩)	鮑取る
竹か浦	沙洞里	鮑之所務の義3月上旬より末方まで、みちのあぶら所務の義4月中旬より5月中旬まで
唐船か崎	可頭峰	鮑取る
たつかはな	不明	鮑取る
竹子嶋	不明	鮑取る
鮑浦世戸	不明	不明
まの嶋(西)	観音島	鮑取る
まの嶋(東)	竹島（竹嶼）	鮑取る

8439号絵図では浦の名前しか記されていないが、享保９年（1724）の「小谷伊兵衛ニ所持被成候竹嶋絵図之写」（米子市立山陰歴史館所蔵）で、島での経済活動について明らかにすることができる【表4-2】。「小谷伊兵衛ニ所持被成候竹嶋絵図之写」には、「濱田浦二三丁左右ニテ鮑取不申候由御絵図御座候、此度召連候水主へ相尋候得者、古来ハ不奉存、私共渡海ノ時節ハ舟乗（参）着仕次第、私共鮑取申候、鮑之所務ノ義三月上旬ヨリ末方マテ餘寒少シ御座候内、籍（箱カ）ニテつき取申候、みちのあぶら所務ノ義四月中旬ヨリ五月中旬マテ油多ク御座候ニ付専猟仕候、其後ハ両所共ニ餘寒無御座候得共、竹嶋帰帆之節逗少宛猟仕候」とあり、大坂浦、北浦、柳浦、北国浦、竹か浦も同じとしている。すなわち、水主からの聞き書きから、アワビ漁は３月上旬より末まで、アシカ漁とアシカからの油の採取はアシカの油の多い４月中旬より５月中旬まで行うとしている。鬱陵島での漁業の実態が明らかとなったのはこの史料が初めてである。一方いか嶋、唐船かはな[6]、たつかはな、竹子嶋（竹ノ子嶋）、まの嶋ではアワビ漁をしていたとしている。岬や小島はアワビ漁専用であったとみられる。

「小谷伊兵衛ニ所持被成候絵図之写」には、「竹か浦」と注記した部分から「唐船かはな」付近にわたって竹林が密生して絵で描かれている。さらに8439号絵図と同系統の絵図、「竹嶋之図」（鳥取県立博物館所蔵8440号）では島の林の状況がより詳細に記載されている。島の中央の「山」と書かれたところには、「此ハハノ内大木色々アリ、但桧杉ナシ」とある。その隣には「島ノ内川七瀬、二瀬ハ十四五間斗（約1.5〜1.6㎞）、五瀬ハ小川」と河川の記載がある。竹林は竹浦（竹か浦）と古大坂浦の付近に絵で書かれており、竹浦のところには、「竪一里斗（約４㎞）、横十町斗（約1.1㎞）竹林」と注記がある。竹か浦には、海岸沿いに約４㎞、山には１㎞ にも及ぶ広大な竹林があったことが分かる。村川家の由来を記した「竹島渡海由来記抜書写」（島根県立図書館所蔵『竹島資料Ⅰ』所収）によれば、文書の前後から寛永年間とみられる亀山庄左衛門書状（村川市兵衛宛）に「竹島御用物之覚」として、大竹五本（長サ三尺程花いけに成候様ニ成ル）、大桐弐本、桐之木（乗物ほう長サ三間程若有之者御廻）、せんたんの板（三枚長サ一間）をはじめ、百合草（三四拾粒程）、にんにく（少し）、にんちん（人参）草（有之者一本ニ而茂）を大坂肥後島橘屋清三郎方へ届けるように書かれている。木材や竹の伐採、草の採取の必要から、山川の状況を詳細に把握していたと考えられる。

「大谷家旧記」（東京大学史料編纂所影写本、杉原副座長よりご教示頂いた）によれば寛文６年（1666）７月に大谷家の船が朝鮮に漂着した際の乗組員が記されている【表4-3】。竹島に渡航した全員ではないが、竹島へ渡海した構成員について、ある程度概要をつかむことができる。上乗、船頭、楫取、アシカ漁を行なう「鉄砲打」、木材を加工する舟大工、桶大工は伯耆から、アワビ漁を行なう「鮑突」は隠岐から、水夫（水主）は伯耆と隠岐から雇っており、渡海した人々は様々な職種にわたっていた。１隻で21名乗船していることから、総勢は40〜50名に及んでいたと考えられる。

現地調査では江戸時代後期に作製された「竹嶋之図」（国立公文書館所蔵）【図4-3】もあわせて検討した。この絵図は天保４年（1833）に写され、さらに明治７年（1891）年に写されたもので、外務省旧蔵である。米子市立山陰歴史館などにも写しがある。杉原副座長の分析によれば、天保４年から竹島へ渡航した石見浜田の今津屋八右衛門が作製した絵図の系統であるとみられる。鳥取藩作製の絵図と比べると、浦（浜）の大きさが記されるほか、岩や付属する島の大きさも記され、海岸の状況が詳細に記されている。その一方で、浦と浦の間の海岸は省略されている。この絵図についても、地形や集落の位置などから、現在の集落をほぼ比定することができた【図4-3】。江戸時代前期と同様、島の形や大きさはまだ不正確であるものの、江戸後期においても、浜や岩を中心とした海岸、付属する小島など、鬱陵島の地理をほぼ正確に捉えていたことが分かる。

このように、絵図と現地調査との対応の結果、小屋が設置された浦の現地比定ができた。鬱陵島では

表4-3　寛文６年(1666)　７月大谷家の船が朝鮮に漂着した際の乗組員

	名前	年齢	職業	出身地	旦那寺宗派	旦那寺
1	二郎兵衛	35	上乗	伯耆	浄土宗	大蓮寺
2	太郎右衛門	36	舟頭	伯耆	禅宗	安国寺
3	久兵衛	40	鉄砲打	伯耆	禅宗	福厳院
4	又右衛門	25	鉄砲打	伯耆	禅宗	西福寺
5	与三右衛門	42	鍛冶	伯耆	浄土宗	大蓮寺
6	太郎右衛門	37	鮑突	隠岐	浄土宗	浄土寺
7	小作	36	鮑突	隠岐	浄土宗	浄土寺
8	五郎作	32	鮑突	隠岐	浄土宗	浄土寺
9	長兵衛	38	舟大工	伯耆	真宗	万福寺
10	伝助	29	楫取	伯耆	禅宗	法増寺
11	久右衛門	22	桶大工	伯耆	禅宗	安国寺
12	作兵衛	39	水夫	伯耆	真宗	万福寺
13	十兵衛	22	水夫	伯耆	法華宗	本教寺
14	作助	29	水夫	隠岐	禅宗	万泉寺
15	次郎左衛門	54	水夫	隠岐	禅宗	万泉寺
16	治兵衛	27	水夫	伯耆	真宗	万福寺
17	角助	32	水夫	伯耆	禅宗	法増寺
18	甚七	44	水夫	隠岐	禅宗	万泉寺
19	九郎助	29	水夫	隠岐	禅宗	万泉寺
20	五助	40	水夫	隠岐	浄土宗	浄土寺
21	彦八	30	水夫	隠岐	浄土宗	浄土寺

（「大谷氏旧記」より作成）

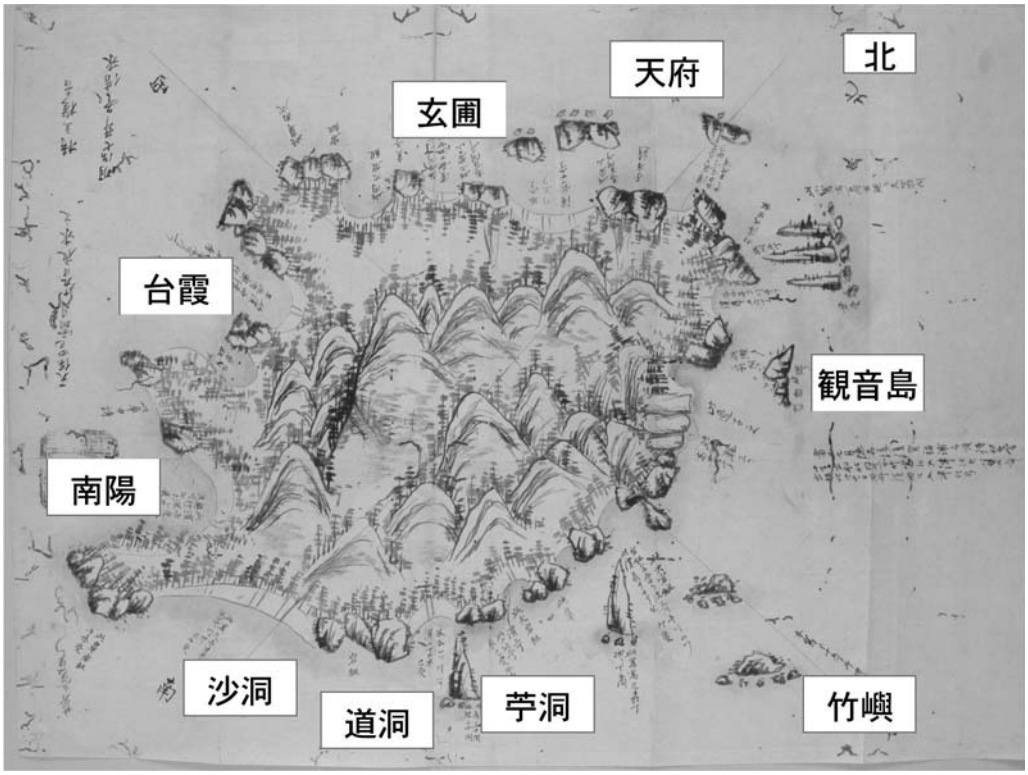

図4-3　「竹嶋之図」（国立公文書館所蔵）の地名比定

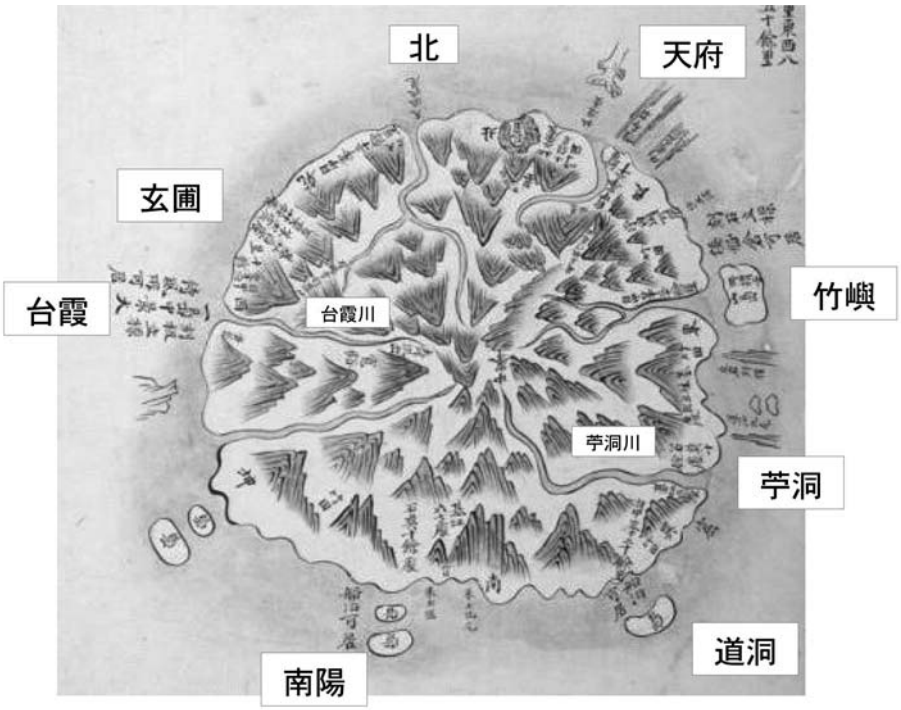

図4-4　『海東地図』所収「鬱陵島図」の現地比定

アシカやアワビ、材木、竹、草の採取といった経済活動を行なっており、そのおよその場所の確認をすることができた。つまり、絵図では島の形や大きさは不正確であるものの、浦、河川、植生、付属する小島など、鬱陵島での経済活動にかかわる地理をほぼ正確に捉えていたことが分かった。絵図は鳥取藩が作製した後、幕府へ提出したことから、江戸時代前期には、大谷・村川家の渡海事業によって、鳥取藩、江戸幕府は、浦を中心に、鬱陵島の地理的状況をほぼ正確に把握していたこととなる。日本の研究者のなかには、大谷・村川家の竹島渡海は事業というべきものではなく、冒険的でしかも小規模なものであったとする指摘もあるが、絵図や史料の分析、そして現地調査の結果では、鬱陵島は土地も豊かで、資源も豊かな島であることが確認できた。また大谷・村川家の事業は、大規模かつ計画的な事業であったことが読み取れる。

2）朝鮮側作製絵図の現地での比定

鬱陵島を詳細に描いた朝鮮側作製の絵図は、１章で述べたように、16点にも及ぶが、本調査では、朝鮮王朝作製の「欝陵島図形」をもとに作製されたと考えられる18世紀中期の『海東地図』所収の「鬱陵島図」を使用した。当時の朝鮮王朝の地理的認識を示していると考えられること、各種の鬱陵島の地図のなかでも記載内容が豊富であることが理由である。また韓国側の主張する現在の独島と主張する于山島が、鬱陵島の東側に描かれ、「所謂于山島」とあり、この島が現在の独島にあたるかどうかが重要である。絵図の比定については第１章で触れているが、ここでは現地調査をふまえ、簡単に触れたい。また絵図の記載が正確かどうか確かめるために、「所謂于山島」以外の場所についても検討した【図4-4】。

島の西側には河川が描かれ、その上流には「大川流出」とある。また「一島中最大待風所、可居」とあることから、ここは「欝陵島図形」と同様、河川は台霞川【写真4-1】、集落は台霞であると考えられる【写真4-8】。「大川流出」の近くには、「寛豁」とあり、土地が開けていたとする。実際現在の地形図をみても、台霞川上流には平坦な地があり、集落が存在している。

島の南には「船泊、可居」とあるが、島の南部で船の停泊可能な場所は、南陽と通九味の２ヶ所である。その近くには、「石葬十餘処」、「基址六七処」とあることから、ここには墓地や集落跡があったことが分かる。「船泊、可居」の東側には「朱土堀」とあり、他の絵図（『東輿図』など）では「朱土窟」とあることから、赤い土（岩）の洞窟であると考えられる。通九味にはこうした洞窟が海岸から確認されたことから【写真4-12】、ここは、南陽ではないかと考えられる。『韓国水産誌第二輯』（1909年）によれば、「此処（南陽洞）は曾て露国人が本島の樹木を伐戴し搬出したる処なり」と記している。これは明治31年（1898）鬱陵島での木材伐採の権利をロシアが取得した際のことであると思われる。そうなると、台霞の南側に描かれている河川は、南陽の位置から、亀岩川の可能性がある。南東に「船泊、可居」とあるのは、鬱陵島の中心地道洞であるとみられる。その北の河川の周辺には、「石葬十餘処」、「基址三処」とあるのは苧洞で、そこに注ぐ河川は、苧洞川と考えられる。さらに北にある岩は、苧洞周辺の北亭岩（北苧岩）、燈台岩であるとみられる。さらに北に注ぐ川は、現在の臥達里周辺と推定される。

次に島の北東にある岩は、絵の描き方から、一本立島（竹岩）、三本立岩（一仙岩、二仙岩、三仙岩）と推定される。その周辺にある、「苧田洞、可居」、「沙土浦」は、三仙岩と観音島の間にある海岸の集落「船倉」と考えられる。実際絵図にはこの近くに「倭船倉、可居」、「刻石立標」と記されている。「鬱陵島図形」にも「倭船倉」について記載があり、標をたてたと記している。この時たてたとみられる石碑が現在も島内の郷土資料館に展示されていた【写真4-13、14】。苧田洞の奥には「有石城門基址」とあり、かつて石城門があったことが注目される。さらに島の北東に位置する河川は天府川で、河口は天府であるとみられる。

島の北には「孔岩」とあるが、これは実際には島の北に浮かぶ「孔岩」である【写真4-15】。孔岩の近くに「大銷岩」とあるのは、孔岩の南に位置する尖った山「錐山」であとみられる【写真4-16】。孔岩の西側に河川が長く描かれているが、これは平里川と推定され、河口は平里と推定される。河川の西にある「大岩」は、現在の老人峰と考えられる。さらに北西に、「基址三四処」「石葬廿餘処」とあるのは、玄圃とみられる。島での聞き取りによれば、ここは鬱陵島でも一番古く開発されたところで、国があったときには首都であったとのことであった。実際ここには古墳が残っている【写真4-17】。また絵図には、玄圃の奥に「有塔寺刹基址」の記載がみられ、かつて塔・寺刹があったことが読み取れる。

なお、島の南部、島の南西部にはそれぞれ島が２ヶ所ずつ描かれているが、実際そのような大きな島はない。ただ南部の通九味、南西部の南陽の付近には岩があり、1882年頃の「鬱陵島外図」でも大きな岩として描かれていることから、この岩である可能性もある。

以上のように、この絵図では、実際大部分現地と比定が可能であることが分かった。港、河川、集落跡、島、岩などを、ほぼ正確に描いた絵図であるといえる。したがって、鬱陵島の東部に描かれる「所謂于山島」は、現在の独島ではなく、竹嶼（韓国名竹島）であると考えられる。Gerry Bevers 氏のホームページには、竹嶼（韓国名竹島）の全景写真が掲載されている【写真4-18】。それによれば、島は北の方が高く、傾斜が南に向かってなだらかに続いている。その地形は、第１章で取り上げた、『青邱図』や『大東輿地図』（国立国会図書館所蔵）の「于山」島の描き方に似ているといえる。このことからも、この島が独島でないといえる。また『海東地図』所収の「鬱陵島図」の記載は、その後の絵図・地図にも踏襲された。観音島については、明治16年（1883）の「鬱陵島図」（国立公文書館所蔵「朝鮮国蔚陵島出張桧垣内務少書記官復命ノ件」所収）によれば、「観音崎」としていることから、当時岬として認識されていたと考えられる。

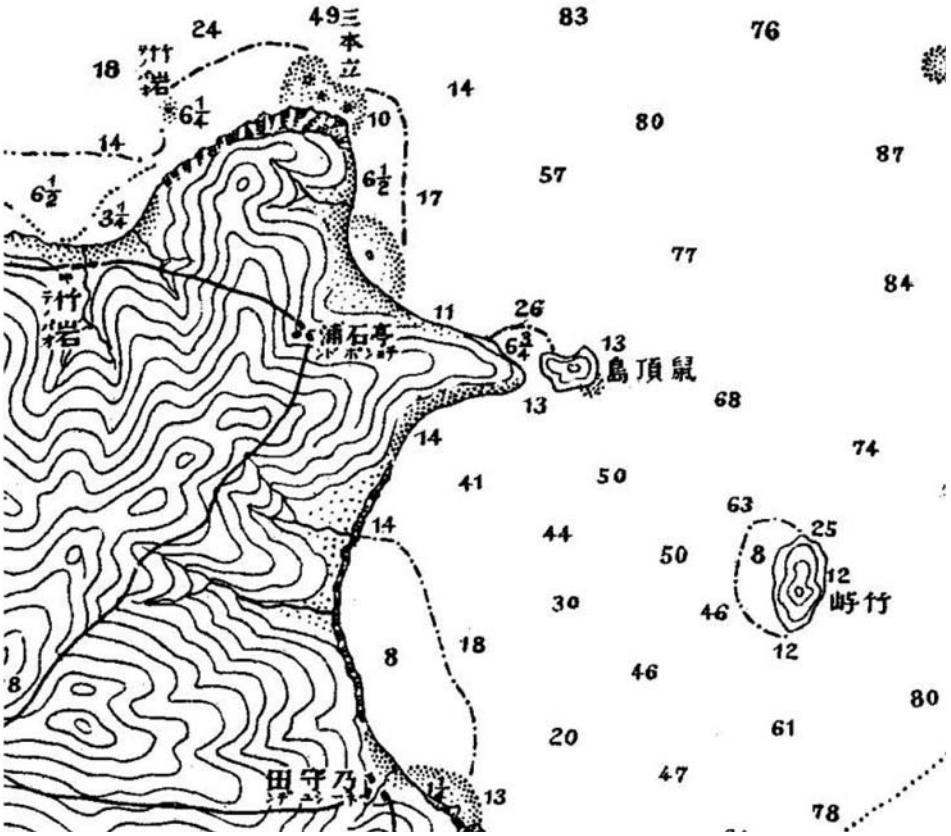

図4-5　『韓国水産誌第二輯』（1909年）所収「鬱陵島全図」（竹嶼・鼠項島付近）

3）大韓勅令41号に記載される石島の比定

韓国側の主張として、1900年の大韓勅令第41号に記載される鬱陵島、竹島、石島のうち、石島が現在の独島であると主張している。独島は鬱陵島の属島であり、独島（ドクト）と石島（ソクト）の発音がよく似ていることが根拠となるとしている。また日本側が石島を観音島にあてるのは史料の歪曲であるとする。しかしながら、大韓勅令第41号では、鬱陵島、竹島（竹嶼）の比定は可能であるが、石島については位置が記されていないため、比定が困難である。また研究会の現地調査の際、韓国側の主張として、鬱陵島周辺では、竹島（竹嶼）以外の島は、島と岩とは区別がつかない、したがって、石島は独島で間違いないとの主張があった。今回の研究会の現地調査では、大韓勅令第41号に記載される石島が、韓国側の主張する現在の独島（竹島）か、日本側が主張する現在の観音島であるかどうかを検討した。

現地調査では、観光遊覧船で、島の周囲から、島、岩を確認した。陸地測量部発行(1917年測図、1918年発行）５万分の１地形図「鬱陵島」では、島として記載があるのは、竹嶼、観音島、胃島（北亭岩、韓国名北苧岩)、一本立島（韓国名竹岩）の４ヶ所である。さらに岩として記載があるのは、孔岩、三本立(一仙岩、二仙岩、三仙岩)、苧洞の沖にある燈台岩、そして島の南東、新里に位置する水霍岩の４ヶ所である。後者の４ヶ所の岩は、地形図をみても、竹嶼とは大きさも違い、岩であることは明白であるので、前者を比較することとした。胃島は、苧洞の北東に位置し、日本の絵図でも「いか嶋」と書かれている。人が立てるような空間はあるものの、草木もほとんど生えておらず、岩がむき出しになっている【写真4-19】。面積も竹嶼、観音島にとても及ばない。また胃島というのは日本名で、韓国では「北苧岩」、つまり岩と称している。また一本立島（韓国名竹岩）は、天府の北東に位置する。胃島よりは面積は大きくみえるが、人が立つようなところは頂上以外ない。上部に草木が生えているのがみえるが、胃

島同様、岩がむき出しになっている【写真4-20】。面積も竹嶼、観音島に及ばない。さらに一本立島も韓国名は竹岩と、岩と称している。つまり、胃島と一本立島は外観上、名称からも岩として分類できる。それに対して、観音島【写真4-10】、竹嶼【写真4-18】とも、海岸付近は岩となっているが、島の上は平坦となっており、樹木が生えていることが分かる。また両方とも、名称は岩ではなく、「島」となっている。

鬱陵島の周辺には、岩が多く存在しているが、現地調査の結果、島は、竹嶼、観音島しか確認されなかった。また島と岩とは外観上も明確に区別された。韓国側の主張で、鬱陵島の周辺では、島と岩とは区別がつかないというのは明確に間違った指摘であるといえる。したがって、石島は観音島である可能性が高いことが明らかとなった。

現地調査の結果は、文献の記載などとも符合する。『韓国水産誌第二輯』（1909年）には、鬱陵島の説明が記されている。それには、鬱陵島周辺の諸島、大きな岩嶼として、竹嶼、鼠項島、孔岩の３ヶ所が挙げられている。鼠項島は島の北東、現在の観音島にあたる。つまり、島としては、竹嶼と鼠項島の二島しか挙げられていない。さらにこの本には「鬱陵島全図」が収録されている。この地図は鬱陵島を正確に記した最初の近代地図である。これにも島として、竹嶼、鼠頂島（本文中では「鼠項島」とする）の二島しか挙げられていない【図4-5】。さらに、Gerry Bevers 氏によれば、「鼠項島」の日本語読みは「ソコウトウ」であり、1900年の大韓勅令第41号に記載される石島の（ソクト）の読みが近いことから、石島の名前の由来は、「鼠項島」に由来するとしており、この説は大変興味深く、斬新な説であると考えられる[7]。また、下條座長のご教示によれば、島の面積は、竹嶼は62,880坪、観音島は21,600坪で、竹嶼の約３分の１となっている。なお、独島は、東島19,605坪、西島27,800坪、あわせて47,405坪であり、島全体の面積は、竹嶼と近いものの、東島、西島それぞれの面積は、観音島に近いことが分かる。

以上のことから、鬱陵島には、付属する島が二島（竹嶼と観音島）あること、大韓勅令第41号に記載される石島が独島であるという主張は、石島の位置も明確ではなく、独島はその前後に作製された地図にも描かれず、また鬱陵島には属島が二島あることを照らし合わせれば、説得力がない。すなわち石島は観音島である可能性が高いことが分かった。

４）独島博物館所蔵の絵図・地図の調査

独島博物館では、展示してある絵図、地図を確認し、絵図・地図に関する韓国側の主張を確認した。ただし調査日程の都合上、すべての絵図、地図を写真などに記録することができなかった。写真など記録にとれなかったものは、独島博物館のホームページに掲載されている絵図、地図を適宜加え、一覧表を作成した【表4-4〜4-7】。

①日本側作製の日本図・世界図（近代以前）【表4-4】

まずは、近代以前に日本側が作製した絵図である。日本図、世界図が含まれる。

1748年の「朝鮮京都日本大坂西国海道航路之図」は、朝鮮・中国から大坂までの航路を記した民間作製の絵図である。松島、竹島は描かれていない。朝鮮半島には、鬱陵島（北）と于山島（南）に描かれている。朝鮮半島の部分は朝鮮図をもとに作製されたとみられる。したがって、これは16世紀末に朝鮮王朝が鬱陵島へ調査し、地図を作製する以前の絵図であり、まだ鬱陵島と于山島の位置が混乱している時代の絵図であることから、この于山島は、現在の独島ではないといえる。長久保赤水と林子平の絵図についてはすでに述べたので省略する。

1809年「日本辺界略図」は、幕府天文方の高橋景保が作製した日本図で、日本列島をアジアのなかで

表4-4　独島博物館展示絵図（１）：日本作製の日本図・世界図（近代以前）

番号	国名	図名	年代	著者	竹島	松島	鬱陵島	于山島	備考
1	日本	朝鮮京都日本大坂西国海道航路之図	1748年	－	×	×	○（北）	○（南）	
2	日本	重鐫日本輿地全図	1783年	長久保赤水	○	○	×	×	
3	日本	三国接壤之図	1785年	林子平	○	×	○	×	竹島（現在鬱陵島）は朝鮮領とする、鬱陵島を２つ記載
4	日本	亜細亜全図　訳	1794年	桂川甫周	×	×	×	×	朝鮮海を表記、ロシア地図を翻訳
5	日本	新鐫総界全図―日本辺界略図	1809年	高橋景保	×	×	○(北東)	○(南西)	于山島は「千山島」と表記、朝鮮海を表記
6	日本	嘉永校訂東西地球万国絵図	1835年	栗原信兆	×	×	×	×	朝鮮海を表記
7	日本	清朝一統之図	1835年	青苔園	○	○	○（南）	○（北）	
8	日本	地球万国方図	1853年	翠堂彭	×	×	×	×	朝鮮海を表記
9	日本	環海航路新図	1862年	広瀬保庵	×	×	×	×	朝鮮海を表記
10	日本	地球万国方図	1871年	湯津香木金	×	×	×	×	朝鮮海を表記
11	日本	新刊地球全図	未詳	－	×	×	×	×	朝鮮海を表記
12	日本	万国地球全図	未詳	－	×	×	×	×	朝鮮海を表記
13	日本	朝鮮全図	1873年	海軍水路寮	×	×	○（西）	○（東）	鬱陵島は「蔚島」と表記、記載内容は近代以前

凡例　○：記載あり　×：記載なし

位置づけているのが注目される。松島、竹島の記載はなく、朝鮮半島には、鬱陵島（北東）と于山島（南西）に描かれている。鬱陵島と于山島の位置から、朝鮮半島の部分は、16世紀までの朝鮮図をもとに作製されたとみられ、混乱した地理認識を示している。

1835年の「清朝一統之図」には、竹島、松島、鬱陵島（南）と于山島（北）が記されている。日本図と朝鮮図を組み合わせて作製した結果、同じ島が２つも描かれることとなった。展示絵図は複製で白黒であったが、カラーの絵図は、『日本の古地図』（1969年、創元社）に収録されている。４島とも、日本（紫色）ではなく、朝鮮の色（黄色）となっている。ただし民間作製の絵図で、しかも地理認識の混乱が著しい絵図であると指摘されており、また当時の幕府の地理認識を示したものではない。

1873年の海軍水路寮作製の「朝鮮全図」は、近代の日本政府の発行したものであるが、伝統的な朝鮮全図をもとに作製したもので、測量した結果の地図ではない。鬱陵島（西）と于山島（東）を描いているが、朝鮮時代後期の朝鮮全図をもとにしたもので、于山島は現在の竹嶼を描いたものである。

残りの世界図は、竹島、松島、鬱陵島、于山島の記載はなく、朝鮮半島東部の海を「朝鮮海」と描いた絵図である。

②韓国作製の朝鮮図（近代以前）【表4-5】

次に、近代以前に朝鮮側が作製した絵図、地図である。これらの絵図はすでに中間報告書および第１章で検討したので簡単にとどめる。

表4-5　独島博物館展示絵図（２）：韓国作製の朝鮮図（近代以前）

番号	国名	図名	年代	著者	鬱陵島	于山島	備考
1	韓国	新増東国輿地勝覧	1530年	李など	○(東)	○(西)	
2	韓国	朝鮮国地理図　附図　八道総図(写)	1592年	九鬼嘉隆など	○(東)	○(西)	1872年の写
3	韓国	八道総図	不明	－	○(北)	○(南)	于山島は「于山」と記すのみ
4	韓国	輿地図（江原道図）	不明	－	○(北)	○(南)	ソウル大学奎章閣（古4709-58）と同じ、展示説明には「堪輿地図」とあり(間違い)
5	韓国	天下総図（江原道図）	不明	－	○(北)	○(南)	于山島は「于山」と記すのみ
6	韓国	輿地誌（江原道図）	不明	－	○(北)	○(南)	鬱陵島は「蔓陵島」と記す、于山島は「于山」と記すのみ
7	韓国	海左全図	19世紀中期	未詳	○(西)	○(東)	
8	韓国	大朝鮮国全図	(19世紀後期)	未詳	○(西)	○(東)	
9	韓国	朝鮮全図	1846年	金大建	○(西)	○(東)	フランス語で表記
10	韓国	大韓地誌（江原道図）	1901年	玄采	○(西)	○(東)	
11	韓国	大韓新地志（朝鮮全図）	1907年	張志淵	○	×	
12	韓国	大韓帝国地図	1908年	玄公簾	○	×	
13	韓国	最新高等大韓新地誌	1909年	鄭寅琥	○	×	

凡例　○：記載あり　×：記載なし

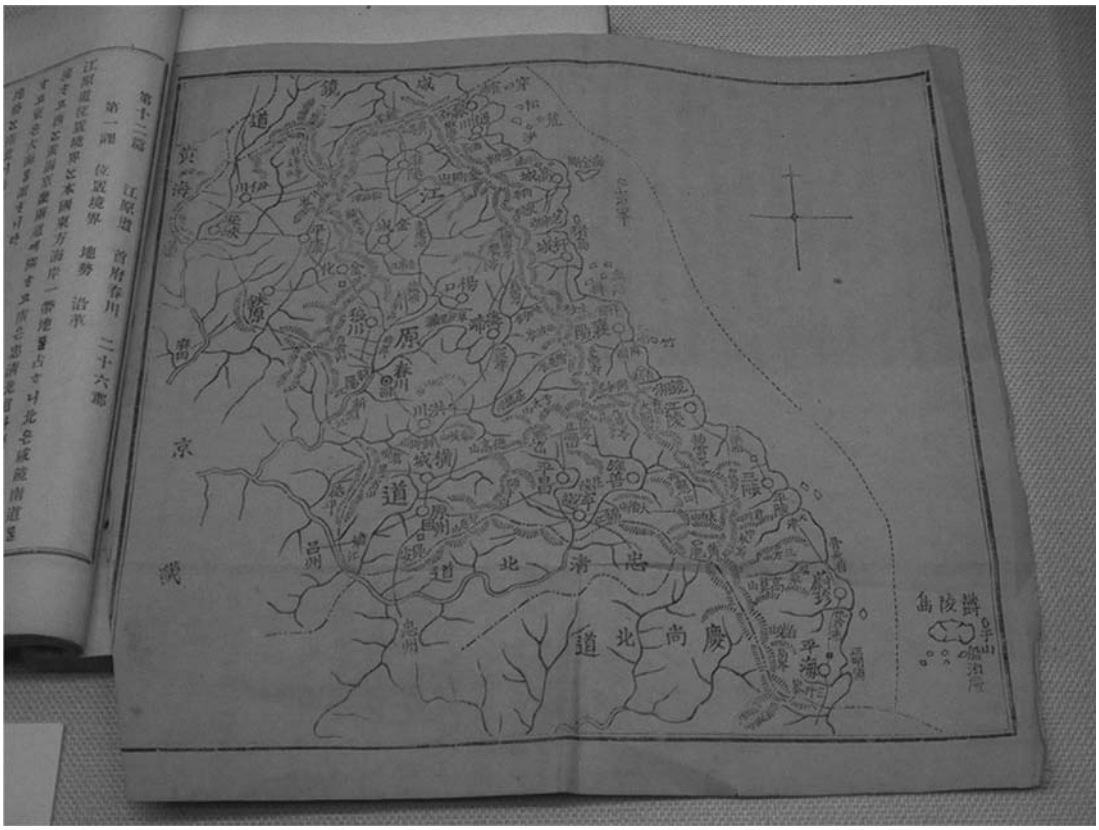

図4-6　『大韓地誌』（1901年）所収の「江原道図」

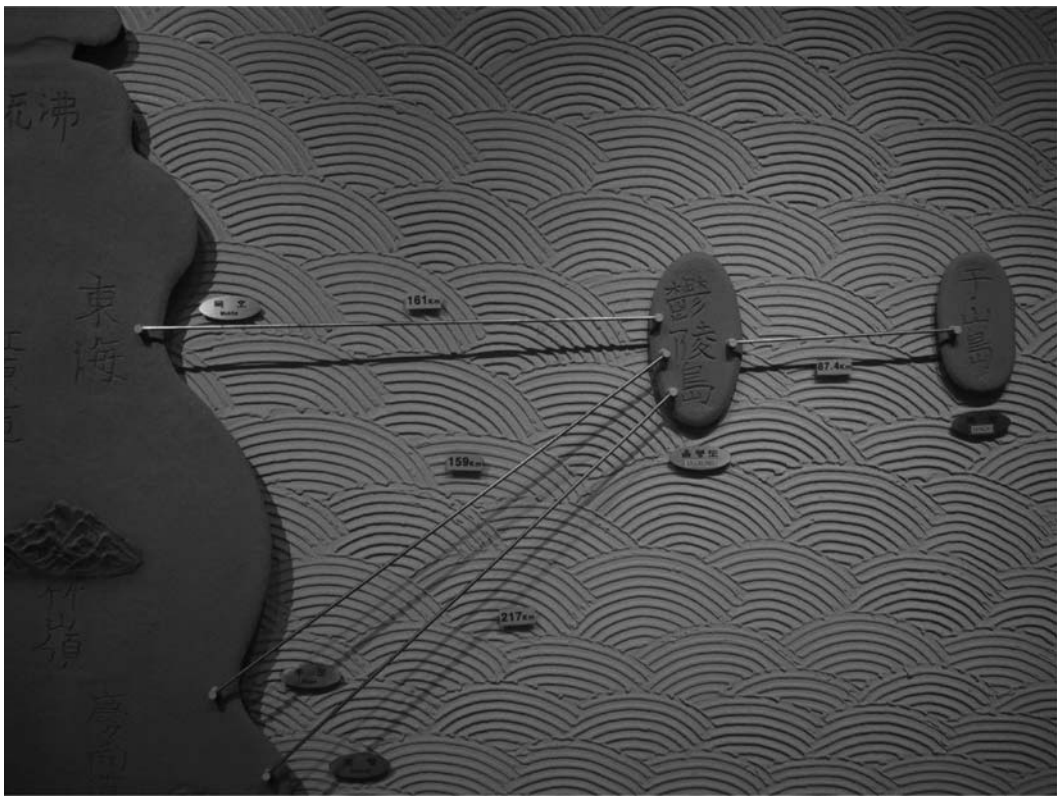

図4-7　第一展示室入口の『八道総図』の展示

1592年の「朝鮮国地理図附図八道総図（写）」は原本は国立公文書館にある。1872年の写本で、文禄の役の際、九鬼嘉隆が朝鮮で写したとされる。八道総図と江原道図に、鬱陵島（東）と于山島（西）が記載されているが、内容は伝統的な朝鮮の八道総図と同様である。

『大韓地誌』、『大韓新地志』、『最新高等大韓新地誌』は20世紀初期に書かれた地誌である。朝鮮全図、江原道図などが収録されているが、いずれも測量図ではなく、朝鮮時代後期の朝鮮図の内容を踏襲したものである。『大韓地誌』（1901年）所収の「江原道図」には、鬱陵島の東側に于山島を描いているものの、その位置は島のすぐ東側にあり、現在の竹嶼であることは明白である【図4-6】。こうした記載は政府の学部編輯局が刊行した「大韓全図」（1899年）、『大韓輿地図』（1900年頃）にもみられる。1900年前後の地理認識は、政府も民間も同じであったことが読み取れる。『大韓新地志』（1907年）の「朝鮮全図」には、于山島は消え、鬱島（鬱陵島）のみの記載となっている。『大韓帝国地図』（1908年）は経緯度も記され、近代地図となっているが、独島の記載はなく、鬱島（鬱陵島）のみ描かれている。つまり1900年以降においても、韓国側では現在の独島は韓国領として認識されていなかった可能性が高いといえる。

なお、第一展示室の入口に、「八道総図」をもとにした地図が展示してあるが、これはすでに指摘されているように（下條、2004）、于山島と鬱陵島の位置が入れ替えられている。現在のところ、「八道総図」で于山島が鬱陵島のはるか東に描かれた絵図は発見されておらず、これは史料の歪曲であるといえる【図4-7】。

③日本・ロシア作製の地図（近代）【表4-6】

政府が発行した地図については、領有権問題を考える上で、重要な資料であるが、すでに第３章で述べたので、ここでは省略する。ロシア製の地図は、1857年ロシア海軍が作製した「朝鮮東海岸図」を1882年に再版したものである。1857年版は日本の海図1876年の「朝鮮東海岸図」のもととなった。当時イギリス、ロシアなど日本海周辺を測量していたが、海図は航行安全のために作製されたものであり、現在の竹島がこの海図に描かれたとしても、朝鮮国の領域にあることを示したものではないことは、先に述

表4-6　独島博物館展示絵図（３）：日本・ロシア作製の地図（近代）

番号	国名	図名	年代	著者	竹島（アルゴーノート島）（存在せず）	松島（ダジュレー島）（現在鬱陵島）	リアンクール岩（現在竹島）	備考
1	日本	●朝鮮全図	1875年	陸軍参謀局	○	○	×	
2	日本	●朝鮮東海岸図	1876年	水路部	○	○	○	アルゴノート島は点線で記す
3	日本	大日本分見新図	1878年	山村清助	○	○	×	松島が北にもう１ヶ所描かれる
4	日本	清国輿地全図	1880年	高田義甫	○	○	×	
5	ロシア	●朝鮮東海岸図	1882年	ロシア海軍	×	○	○	1857年刊行の海図の再版
6	日本	銅板朝鮮国全図	1882年	木村文造	○	○	×	
7	日本	朝鮮国全図	1882年	鈴木敬作	○	○	×	
8	日本	大日本八道支那三国全図	1882年	武田勝次郎	○	○	○	
9	日本	●世界全図	1887年	海軍水路部	×	○	○	
10	日本	地学新編　上（自然全図）	1889年	内田嘉一	○	○	×	島名は記さず
11	日本	分邦詳密大日本地図（大日本国全図）	1892年	杉本七百丸	○	○	×	
12	日本	朝鮮輿地図	1894年	中村鍾美堂	○	○	×	
13	日本	清国新地図	1894年	炭谷博次郎	○	○	×	竹島の位置に鬱島、その東に竹島が記載：地理的混乱がみられる
14	日本	●朝鮮全岸	1896年	水路部	×	○	○	
15	日本	日本海海戦図	1905年	博文閣	×	○	○	
16	日本	最新旅行用日本全図（朝鮮全図）	1911年	博愛館	×	○	○	鬱陵島（松島）とする、竹島は位置が不正確（鬱陵島の北東に位置）
17	日本	●陸地測量部発行地図区域一覧図	1936年	陸地測量部	×	○	○	地形図の一覧、図幅名（鬱陵島、竹島）が記される、「竹島」は、結局発行されず

凡例　○：記載あり　×：記載なし、●：政府発行
注：島の位置は経緯度の記載をもとに記した

図4-8　「銅板朝鮮国全図」（木村文造）

図4-9　「朝鮮国全図」（鈴木敬作）
対馬の位置から、竹島はアルゴノート島であることが分かる

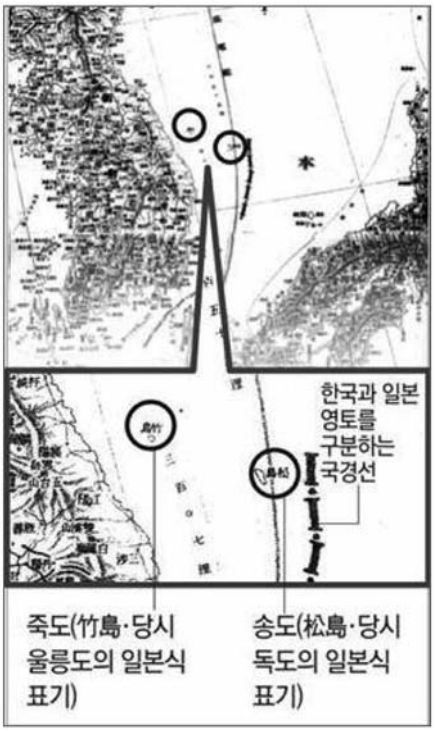

図4-10　「実測日清韓軍用精図」（東亜日報より）

べた通りである。

1936年の陸地測量部の「陸地測量部発行地図区域一覧図」も韓国側の研究でよく引用される地図である。5万分の1地形図の一覧図で図幅名と発行年次が記されているが、竹島の図幅名が、本州ではなく、「朝鮮及関東州」のなかに入っているため、島根県編入後も、日本政府は韓国領と認識していたというものである。しかし、国際法では、政府が行政権がどのように及んでいるかが重要であり、当時、竹島は島根県隠岐支庁（1939年以後は五箇村に編入）の管轄下にあり、当時の島根県隠岐支庁に竹島関係の行政文書が残っていることからも、行政権は、日本政府、島根県の管轄下にあったことは明白である。なお、1944年の「陸地測量部発行地図区域一覧図」（日本国際地図学会『地図』31-4所収）によれば、竹島は1936年と同様、図幅名が記されているものの、発行年次が書かれていない。結局竹島の5万分の1地形図は発行されなかったのである。これは1940年竹島が海軍用地に移管されたことと関係していると考えられる。以上のことから、韓国側の「陸地測量部発行地図区域一覧図」に関する主張は根拠がないことが分かる。

他の地図は、民間が発行した地図である。展示資料のなかで、こうした地図が一番多かった。しかしながら、民間作製の地図は、政府の認識を示しているわけではないので、領有権の証拠とならない。地図の多くには、朝鮮半島の周辺に、竹島、松島が描かれている。韓国側はこのことをもって、日本側が、現在の竹島を朝鮮領として認識したと解釈している。しかし、地図をみると、多くは経緯度が記されており、両島の経緯度をみると、竹島は、アルゴノート島(実在しない島)、松島はダジュレー島、すなわち、現在の鬱陵島にあたることが分かる。例えば、1882年(明治15)「銅板朝鮮国全図」（木村文造）【図4-8】、同年「朝鮮国全図」（鈴木敬作）【図4-9】では、経緯度から、竹島は実在しない島、松島は現在の鬱陵島であることが読み取れる。1882年の「大日本八道支那三国全図」では、竹島、松島、リアンクール岩の3島が描かれている。1894年の「清国新地図」では、鬱島（鬱陵島)、竹島、松島が描かれているものの、竹島の位置は経緯度からアルゴノート島となり、その西側に鬱陵島を描いている。松島は現在

の鬱陵島の位置に書かれている。現在の竹島は書かれていないのである。鬱陵島、竹島、松島の位置について、地理的に混乱している状況が読み取れる。

韓国側がこのような解釈をしている一背景として、韓国側は、明治期も日本側が松島＝独島（竹島）、竹島＝鬱陵島と認識しているとの理解で地図を読み込んでいることが考えられる。実際そういう認識で書かれている文献もみられるが、当時発行された地図のほとんどはそうではなかった。竹島＝アルゴノート島(実在しない島)、松島＝ダジュレー島＝鬱陵島とする地図が明治期になって発行されたのは、当時日本政府が発行した地図、特に海図にそのように記載されていたからである。海図は、主として欧米製の海図、水路誌をもとに作製された。水路部が参考とした欧米製の海図では、竹島をアルゴノート島、松島をダジュレー島とし、さらにリアンクール岩（現在の竹島）を描いていた。1867年のイギリス海軍作製海図「日本•朝鮮図」（島根大学附属図書館所蔵）では、タコ島（竹島）はアルゴノート島とし、すでに点線で書かれている。松島はダジュレー島とし、位置と形状から、これは現在の鬱陵島である。リアンクール岩（現在竹島）には、1849年にフランスにより発見されたこと、イギリスではホーネット島、ロシアではメネライ、オリウツと称すると書かれている。こうした記載は、1857年のロシア製海図「朝鮮東海岸図」をもとに作製された1876年海軍省水路局作製「朝鮮東海岸図」にも踏襲されている。

つまり、この時期の地図に描かれている松島は、現在の竹島ではなく、現在の鬱陵島であることが分かる。竹島とされたアルゴノート島は、1896年（明治29）水路部作製「朝鮮全岸」では消え、それ以後の地図では、松島（現在鬱陵島）とリアンクール岩（現在竹島）のみが記されるようになる。

韓国側のこうした解釈は、最近の新聞報道でもみられる。2006年10月25日付の朝鮮日報、東亜日報によれば、世宗大学保坂教授は、1905年に日本が竹島を編入する前に、日本側が独島を韓国領である地図２点を公開したと報道している。一つは東京府士族鈴木敬作の1882年「朝鮮国全図」、もう１点は吉倉清次郎の1895年「実測日清韓軍用精図」である。「朝鮮国全図」は先に記した通りである。「実測日清韓軍用精図」は松島（独島）の東に国境線が引いてあり、松島（独島）は韓国領であったとしている【図4-10】が、この地図も経緯度から、竹島＝アルゴノート島、松島＝ダジュレー島＝鬱陵島である。つまり、いずれの地図にも現在の竹島は描かれていないのである。

④日本・韓国・連合国作製の地図（第二次大戦後）【表4-7】

1946年の連合国最高司令部が作製した「SCAP：Japan and South Korea」はSCAPIN677号と呼ばれるもので、韓国側はこれをもって韓国領とするが、これは連合国側の最終決定でないと連合国側によって表明されており、これをもって韓国領とする根拠とはならない。

1946年の「内務省地理調査所地図一覧図」にも竹島が含まれていない。これもSCAPIN677号やマッカーサーラインで、竹島に対する日本の行政権が停止されており、この時期に新たな地形図を作製することはできなかった。竹島に対する行政権の停止は最終決定ではないというのは先に述べた通りである。

同じく1946年の「日本新分県地図（島根県）」は民間機関作製の地図であるので、領有権を論ずる史料ではないといえる。

表4-7　独島博物館展示絵図（４）：日本・韓国・連合国作製の地図（第二次大戦後）

番号	国名	図名	年代	著者	鬱陵島	竹島	備考
1	連合国	SCAP：Japan and South Korea	1946年	連合国最高司令部	○	○	SCAPIN677、韓国領とする
2	日本	内務省地理調査所地図一覧図	1946年	内務省地理調査所	×	×	
3	日本	日本新分県地図（島根県）	1946年	日本地図株式会社	×	×	
4	韓国	中等国土地理附図	1947年	地学社	×	×	東朝鮮海を表記

凡例　○：記載あり　×：記載なし

1947年の「中等国土地理附図」は、朝鮮半島東側の「東朝鮮海」を表記しているが、竹島は書かれていない。

以上の検討から、調査の結果、独島博物館には、日本、韓国の地図史にとって重要な史料が展示されているものの、独島が韓国領であることを示す絵図、地図は１枚も展示されていないことが明らかとなった。

おわりに

従来の竹島研究では、史料の一部のみを解釈して研究される傾向がみられた。地図においても、地図上の于山島や竹島のみ、特にその記載の有無について焦点をあてる傾向がみられる。またある種の先入観やイデオロギーをもとにして研究される例も多々みられた。地図の分野でいえば、特に韓国側の研究において、于山島＝松島という前提で地図を分析している傾向がみられる。その結果、史料解釈上、また地図の分野においても、明らかに間違った解釈が多々みられた。近年竹島問題がクローズアップされてから、こうした史料の間違った解釈が拡大再生産されている。昨年秋大邱大学校での韓国側との意見交換の際にも、韓国側の主張として、「古地図は正確でないので、正確でない地図を現在の価値観で検討しても意味がない。当時の世界地図にも誤りが多数みられる」とした指摘があった。しかしながら、地理学の分野では、歴史的地図を検討する際に、当時の地図は当時の空間認識を反映しているものであり、古地図の分析によって当時の地理的認識が明らかにできるという考え方がすでに欧米をはじめ日本でも確立しているのである。間違った解釈をしないためには、地理学、地図史にかかわる従来の研究をふまえた上で解釈する必要がある。さらには史料の全貌をつかみ、史料にもとづいた解釈が求められる。地図の分野でいえば、地図の悉皆的な調査をふまえ、記載の有無、彩色の有無といった地図の表面的な分析だけでなく、他の絵図との比較、絵図の作成目的、背景についても考察する必要がある。

本稿では、２年間で検討した地図をふまえ、①日本、朝鮮とも17世紀末期には、現在の鬱陵島についてはほぼ正確に把握しており、日本では現在の竹島もほぼ正確に把握していたこと、②日本では鬱陵島渡海禁止後も、江戸時代にわたって両島を認識していたのに対し、朝鮮では現在の竹島は17世紀末期に鬱陵島から確認したにすぎず、朝鮮王朝時代にはほとんど地理的に認識されていなかったこと、③現在の竹島の正確な位置が把握されるのは、西欧によって測量された地図が刊行された19世紀中期以降であったこと、④日本では明治以降、西欧作製の海図を参考にして、現在の竹島の位置、存在を認識していたものの、朝鮮側では20世紀初期まで竹島を認識していなかったこと、などが明らかとなった。しかしながら２年間の調査では、地図の全貌がつかめたわけではない。今後も継続した研究が必要であり、そのためには、竹島問題（鬱陵島も含める）にかかわる史料を、日本・韓国は当然のこと、欧米なども含めた悉皆的な調査をする必要がある。今後も史料の調査・整理・解読・分析の継続が求められ、最終的には研究成果をまとめた竹島にかかわる史料集の刊行が必要であろう。そうした地道な積み重ねによって、ようやく日韓両国が冷静な議論ができると思われる。

【註】

１）わずか１泊２日の滞在で、しかも時間の都合上、陸路での調査はチャーターした車内からの目視しかできなかったため、今後の調査で調査結果が訂正される可能性がある。今後継続した調査が必要である。臥達里は大きな集落ではないが、8443号絵図の「まの嶋」（現在の竹嶼）の位置関係から比定した。なお、臥達里は時間の都合上写真を撮影することができなかった。

2）「たつかはな」は、「辰か鼻」とみられることから、東南東の端ということとなる。道洞付近の岬であると考えられる。また、米子市立山陰歴史館所蔵の「竹嶋絵図」（写真版）に、島の北東部に島（まの嶋）が2つ描かれており、8439号絵図にもほぼ同じ位置に島が2つ描かれており、その位置から、一つは竹嶼（韓国名竹島）、もう一つが現在の観音島【写真4-10】であるとみられる。したがって、「竹ノ子嶋」は現在の観音島の可能性がある。詳細は今後の課題としたい。

3）「小谷伊兵衛ニ所持被成候竹嶋絵図之写」（米子市立山陰歴史館所蔵）では、「一、世戸ト御座候得共所究申義ノ様ニハ不奉存候、沖ニ小嶋御座候処都テ世戸ト申候」とあることから、小さな島、岩を指すと考えられる。

4）特に位置の比定には、記載内容が詳しい「竹嶋絵図（写真版）」（米子市立山陰歴史館所蔵）と、享保9年（1724）の「小谷伊兵衛ニ所持被成候竹嶋絵図之写」（米子市立山陰歴史館所蔵）のうち、原図に注記を加えた部分（赤字で記す）を使用した。

5）8439号絵図と同系統の絵図、「竹嶋之図」（鳥取県立博物館所蔵8440号）では「但南風ニハ船繋カレス、灘へ居置」、「竹嶋之図」（鳥取県立博物館所蔵8441号）では、「但南風ニハ船懸り難く灘へ船居置申候」とあり、船を灘へ据え置いたとしている。

6）「竹嶋絵図（写真版）」（米子市立山陰歴史館所蔵）では、「唐船か崎」とある。

7）Gerry Bevers氏のホームページ（ブログ）による。
http://www.occidetalism.org/?p＝377
なお、氏のホームページについては、国立国会図書館の塚本孝氏よりご教示頂いた。

【文献】

川上健三（1966）：『竹島の歴史地理学的研究』、古今書院
南波松太郎・室賀信夫・海野一隆（1969）：『日本の古地図』、創元社
海上保安庁水路部編（1971）：『日本水路史1871～1971』、日本水路協会
秋岡武次郎編（1971）：『日本古地図集成』、鹿島研究所出版会
中村　拓監修（1972）：『日本古地図大成』、講談社
平　重道（1977）：『仙台藩の歴史Ⅳ 林子平その人と思想』、宝文堂出版
塚本　孝（1980）：竹島関係旧鳥取藩文書および絵図（下）、レファレンス412号（昭和60年5月号）
堀　和生（1987）：1905 年日本の竹島領土編入、朝鮮史研究会論文集24号
李　燦（1991）：『韓国の古地図』（韓文）、汎友社
吉田光男監修（1994）：『大東輿地図』（復刻、初版1936 年）、草風館
岸本　覚（1998）：幕末海防論と「境界」意識―「志士」集う「場」を中心に―、『江戸の思想9　空間の表象』、ぺりかん社
宋　炳基著、内藤浩之訳（1999）：朝鮮後期の欝陵島経営、北東アジア文化研究（鳥取女子短期大学北東アジア文化総合研究所）10号
内藤正中（2000）：『竹島（鬱陵島）をめぐる日朝関係史』、多賀出版
浜田市教育委員会編（2002）：『石見学ブックレット3 八右衛門とその時代』、浜田市教育委員会
楊　普景（2003）：15～17世紀、朝鮮の世界地図と世界認識、21世紀ＣＯＥプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」15・16・17世紀成立の絵図・地図と世界観ニューズレター第3号
楊　普景・渋谷鎮明（2003）：日本に所蔵される19世紀朝鮮全図に関する書誌学的研究―『大東輿地図』および関連地図を中心に―、歴史地理学45-4
下條正男（2004）：『竹島は日韓どちらのものか』、文藝春秋
金　学俊著、保坂祐二訳（2004）：『独島/竹島韓国の論理』、論創社
三好唯義・小野田一幸（2004）：『図説日本古地図コレクション』、河出書房新社

下條正男（2005）：『「竹島」その歴史と領土問題』、竹島・北方領土返還要求運動島根県民会議
朴　炳渉（2005）：竹島＝独島は日本の「固有領土」か？、『飛礫』47号、つぶて書房
保坂祐二（2005）：『日本、古地図にも独島はない』（韓文）子音と母音社
内藤正中（2006）：島根県竹島報告書に異議あり、郷土石見71号
韓国・国立中央博物館編（2006）：『行ってみたい我が領土、独島』（韓文）、韓国・国立中央博物館
篠塚富士男（2006）：古地図画像データベースの公開について、筑波大学附属図書館報つくばね31-1